

《論文》

自尊感情の変動性における日常の出来事と自己の問題

福島大学人間発達文化学類 中間 玲子
 中部大学人文学部 小塩 真司

自尊感情の変動性における日常の出来事と自己の問題

要約：自尊感情の変動性について、自己および日常の出来事に注目して検討を行った。大学生約400名を対象に、一週間の日記式質問紙を行い、そこで報告された7日間の自尊感情得点の標準偏差をもって、自尊感情の変動性の指標とした。自己認識欲求、自意識特性、出来事のとらえ方における自尊感情の変動性による差異の検討、出来事の肯定性評定と自尊感情との関係モデルの検討を行った。その結果、自尊感情の変動性の大きい者は、肯定的な出来事はより肯定的に、否定的な出来事はより否定的にとらえていること、出来事が自分に与える影響をより大きくとらえていることが示された。また、出来事と自尊感情との関係は、出来事の肯定性評定がその日の感情に影響を及ぼし、その日の感情がその日の自尊感情に影響を及ぼすというモデルによって理解されること、そして自尊感情の変動性の大きい者においては、それらの変数間の関係がより強いことが示された。

キーワード：自尊感情の変動性、日常的出来事、感情、日記式質問紙、自己

問題

自尊感情とは、ごく大まかな言い方をすれば、個人の自己に対する全体的な好意的評価である (Baumeister, Smart, & Boden, 1996)。1960年代以降、個人の内面に対して自尊感情が果たす役割に関して、多くの研究が蓄積されてきた。そのほとんどは、自尊感情の高低の次元に注目したものであった。ただし、自尊感情に関する議論で考慮すべきは、その高低の次元のみではない。たとえば考慮すべき重要な次元の1つとして、その安定性 (stability) - 不安定性 (instability)

の次元が古くから指摘されている。自尊感情を測定する尺度の作成者として有名な Rosenberg (1965) も、尺度作成の時点ですでに、自尊感情の安定性を考慮する必要性について言及していた。本研究は、自尊感情の高低のみでなく、安定性の次元を含めて、個人の自尊感情の構造を検討することを大きな目的とする。

自尊感情の安定性についてなされた研究では、ある程度の期間、たとえば2,3ヶ月～数年を経ても、自尊感情が安定しているか否かが検討されることが多かった (e.g., Kugle, Clements, & Powell, 1983; Mortimer, Finch, & Kumka, 1982; Wells & Sweeney, 1986)。たとえば、Kugle, Clements, & Powell (1983) は、4ヶ月間のスパンをおいて測定した2つの自尊感情のスコアにおける一致率をもってその指標としている。これは、自尊感情というものが、自己全体に対する評価感情であるため、我々の自己感情の中でも、「われわれの満足や不満足に対する客観的理由とは無関係の、ある平均的な調子の自己感情がある」(ジェームズ, 今田訳, 1992, p. 254) とされる種類のものであると考えられるからである¹。それゆえ、安定しているものであるという前提の中で、期間を経るとどのくらい変化するのかという問いが立てられ、検討されていたのである。

だが実際には、1日ごと、あるいは出来事を経験した後の状態など、短いタイムスパンにおいて自尊感情がどの程度変動するのか、という点こそが、自尊感情の安定性を考える上では重要であると考えられるようになってきた。自尊感情は適応的に生きるために必要なものであり、その高さは適応の指標であると考えられることが多いにもかかわらず (e.g., Bednar, Wells, & Peterson, 1989; Taylor & Brown, 1988; Mruk, 1995; Whitley, 1983)、その見解に矛盾する結果も報告されるようになった。たとえば、社会的に不適応的とき

¹ ジェームズは、我々の自己感情のうち、自己評価的なものとして、大きく「自己に対する満足」と「自己に対する不満足」の2種類をあげた。そしてこれらについて、「心に浮かんだ快の総計が自己に対する満足をつくり、心に浮かんだ苦の総計がこれと反対の羞恥感をつくると考える」(ジェームズ, 今田訳, 1992, p. 253) という面も考えられるが、同時に、「われわれの満足や不満足に対する客観的理由とは無関係の、ある平均的な調子の自己感情がある」(ジェームズ, 今田訳, 1992, p. 254) と述べ、区別をしている。そして、我々の自尊感情は後者に属するものであり、ある程度の期間、安定しているものと考えられていた。前者は、「自己評価の変動」という言葉で扱われることが多い。具体的には、学業場面などにおいて、その場面に対応する領域の自己概念 (たとえば学業的自己概念) に対する評価がどう変動するかという問いのもと、検討が進められてきたという違いがある。

れ、自尊感情の低さの表れと考えられていた、暴力的な行為や危険な行為の遂行に関しては、むしろ自尊感情の高い者において多く見られること (see Baumeister, Smart, & Boden, 1996)、自我脅威場面においては自尊感情の高い者の方がその場面に対する反応に固さが見られること (Baumeister, Heatherton, & Tice, 1993; Blaine & Crocker, 1993)、自尊感情の高さゆえに対人関係が悪くなる可能性があること (Colvin, Block & Funder, 1995)、怒りや敵意などの攻撃性に関する概念については、自尊感情との関係は明確ではないこと (Kernis, 1993) などが報告された。このような現象を理解するための研究の流れの1つとして²、自尊感情を高低以外の次元も含めて、すなわち、その安定性の次元も含めてとらえ直す必要性が高まってきたのである。そこで問われたのは、長期間をとらえた際ではなく、短いタイムスパンで見た際に、自尊感情がどの程度安定しているかという点であった。

我々の自尊感情が、日常の中で多少の変動をしながらも、全体としてほぼ一定の調子を保っていると考えられることは十分可能である。Kernis, Granneman, & Barclay (1989) は、この点に着目し、自尊感情の安定性の問題を“短期間における個人の全体的自尊感情の変動の大きさ”に関する問題とした。Kernisらは、その概念的意味をより明確に示すために“変動性 (instabilityあるいはvariability)”という言葉を用いているが、以後、本研究でも“変動性”という言葉を用いることとする。また、これまでの自尊感情研究の流れをふまえると、検討を必要とされている自尊感情の安定性の問題とは、この変動性の問題であったと考えられる。よって、本研究でも自尊感情の変動性に注目して、以後、議論を進める。

これまでの研究から、自尊感情の変動性は、評価的な出来事への過敏さ、自己観に関する不安の増加、評価の源泉を外に求めてしまうことなどと関連することがわかってきた (Kernis, Granneman, & Barclay, 1989; Kugle, Clements, & Powell, 1983; Rosenberg, 1986; Turner, 1968)。たとえば、Greenier, Kernis, Waschull, Berry, Herlocker, & Abend (1999) などが指摘し続けているように、自尊感情の変動性の高い者は、自己価値の基準を他者におく傾向が強いことが明らかにされている。また、Miyake (1993) は、自尊感情の変動

性の高さが、上方比較と正の関係にあることを明らかにしている。これらからは、自尊感情の変動性の高い者は低い者よりも、他者や社会との関係の中での自己情報を得ようとする傾向が強いのではないかと考えられる。

本研究では、まずこの点に注目し、自尊感情の変動性によって、自己のとらえ方のメカニズムが異なるか否かを検討することを第1の目的とする。具体的には、自己に関する情報をどの程度得ようとしているのかということに関する“自己認識欲求”、日常の中で自己をどの程度意識しているのかに関する“自己意識特性”について測定し、それらにおける自尊感情の変動性による違いを検討していくこととする。

ところで、Kernis, Greenier, Whisenhunt, Herlocker, & Abend (1997) や Kernis, Whisenhunt, Waschull, Greenier, Berry, & Herlocker (1998) においては、自己と自尊感情の変動性との関連を、「出来事」という変数を導入することによって、より詳しく検討しようとしている。たとえば Kernis, et al. (1998) は、日常的なストレスが抑うつ的な症状に対して与える影響を4週間にわたって検討したところ、自尊感情の変動性が高い者の方が、よりその影響を受けていることを明らかにしている。つまり、自尊感情の変動性の高い者は、出来事に対して過度に反応し、それに連動して自尊感情のレベルが上下する者であり、出来事と自尊感情の両者が、より密接に関わっていた。さらにいうと、自尊感情の変動性の高い者が、特別に自尊感情と深く関わるような経験をしていたわけではなかった。Greenier, Kernis, Waschull, Berry, Herlocker, & Abend (1999) において、被験者によって報告されたその日の出来事の内容についての第三者評定がなされたが、その内容自体が自尊感情の変動性の大小によって異なっていたわけではないのである。これは、自尊感情の変動性の高い者は低い者に比べて、たとえ同じような内容であったとしても、より自分自身に関係したものととらえ、そこからより強い影響を受けることを意味する。ここから、自尊感情の変動性の高い者が、特に自己を変容させるような大きな出来事に頻繁に遭遇しているというわけではなく、誰しもが遭遇するような出来事であっても、それが自尊感情に影響を及ぼす程度が高いと考えられた。

² 他の流れとしては、自尊感情の高さの質を概念的に区別しようとする方向性を上げることができる。これは、真の自尊感情とは何かという問いにつながる。たとえば、防衛的自尊感情 (Schneider & Turkat, 1975)、条件付き自尊感情 (Deci & Ryan, 1995)、顕在的・潜在的自尊感情 (Epstein & Morling, 1995)、肥大した自尊感情 (Baumeister, Smart, & Boden, 1996) など、様々な表現で考察がなされており、いずれも、データとして得られる、あるいは自己報告される自尊感情の高さに、その報告に際する防衛よりもより深いところにおいて、被験者の否定的心性が隠されている可能性を指摘するものである。

自尊感情の変動性の個人差要因を考える上で、出来事と自己との関連性を問うこの視点は、非常に有効なものと考えられる。よって、出来事と自尊感情との関係をふまえながら、自尊感情の変動性について検討していくことを、本研究における第2の目的とする。出来事と自尊感情との関係のとりえ方については、両者の関係性に関する評定についての検討、および、出来事評定と自尊感情評定とをそれぞれとりあげた上での両者の関係についての検討、の2点から検討を行い、より多角的にとらえていくことをめざす。

Greenier, Kernis, Waschull, Berry, Herlocker, & Abend (1999) が自尊感情の変動性が高い者は活動に対する自己関与が強いと指摘していることから、出来事が自分に与える影響という点でも、より大きなものと感じているであろうと予測される。また、何らかの事象が個人の自己にとって重要であるとされればされるほど、自尊感情に与える影響が大きいことが Morretti & Higgins (1990) や遠藤 (1992) などによって指摘されている。これは、重要な事象であればあるほど、個人にとっての価値的色彩を強く帯びてくるからではないかと考えられる。つまり、肯定的な出来事はより肯定的なものとして、否定的な出来事はより否定的なものとしてとらえられるようになるのではないかとということである。

出来事のとりえ方については、以上のように、出来事の影響の大きさについての自己評定、および、出来事の価値付与の仕方、すなわち、出来事の肯定性あるいは否定性の評定の程度に注目し、それらにおける自尊感情の変動性による違いを検討する。

“出来事の自分に対する影響の大きさ”や“出来事への価値付与の仕方”とは、出来事と自己との関係そのものを示す変数である。だが、先行研究ではそのような直接的な出来事と自己との関係についての変数ではなく、出来事についての変数と自尊感情との変数の関連という形で検討がなされてきた。つまり、同じ問題について、別のアプローチがなされてきたのであり、両者の分析を重ね合わせることで、より多角的な理解が得られるであろうと考えられる。

そこで、本研究ではさらに、先行研究に倣い、“出来事の肯定性の程度”と“自尊感情の程度”という個別の変数間の関係についての検討も行うこととする。すなわち、出来事の肯定性と自尊感情についての各得点間の関係を軸としたモデルを設定し、それについての検討を行う。なお、ここでは、自尊感情の変動性というものが、出来事がその日の自尊感情に及ぼす影響

の個人差によるものであるのか、あるいは、出来事がその日の感情状態に及ぼす影響の個人差を反映したものであるのか、それとも、その日の感情状態が自尊感情に及ぼす影響の個人差によるものであるのか、についても考えていくことをねらい、出来事とその日の自尊感情との間に、その日の一般感情を位置づけたモデルを想定することとする。誰しもよい出来事があれば嬉しく感じるし、いやな出来事があつたら不快感を抱くわけであるが、そこでの感情の振幅の程度にも個人差が想定される。自尊感情の変動性とは、そもそも、出来事との関係における感受性の強さ自体の個人差を反映したものであるのか、それとも、抱いた感情が自尊感情という全体的な自己価値の感情にまで至るか否かの個人差であるのか、という問題である。

以上の問題に基づき、以下において検討を行う。また、本研究では、自尊感情の変動性は、Kernis, Graneman, & Barclay (1989) の方法を用いて測定することとする。Kernis et al. (1989) では、被験者に1～2週間の間、毎晩自尊感情を評定させ、そのスコアの標準偏差の程度を変動性の指標とした。この方法は、日常において様々な出来事を経験する個人の文脈に即した形で自尊感情を測定することにより、それらをおしなべた際に、個人の自己感情が実際にその都度の文脈においてどの程度の揺れ幅をもつのかを把握していくことを目的としたものであった。

方法

調査手続き

大学生を対象とし、以下に示すような、3つの質問紙調査を8日間にわたって行った。各調査における回答者の照合には学籍番号を用いた。なお、分析目的によって用いる調査は異なるため、各々の分析に必要な調査に回答している者を各分析の対象とした。

1. 第1回調査

調査時期 2001年12月10日(月曜日)。

調査方法 以下の内容からなる質問紙を、講義時間を利用して一斉に実施した。第1回調査の回答者数は大学生452名(男性241名、女性211名)、平均年齢は20.294 ($SD = .896$) 歳であった。

調査内容 (a) 自己認識欲求: 上瀬 (1992) が作成した42項目を用いた。「全くそう思わない」から「そう思う」までの5件法で尋ねた。(b) 自意識尺度: 菅原 (1984) が作成した自意識尺度日本語版21項目を用いた。「全くあてはまらない」から「非常にあてはま

る」までの7件法で尋ねた。

2. 第2回調査（日記式質問紙）

調査時期 第1回調査日（2001年12月10日）から7日間（月曜日～日曜日）、毎晩記入。調査期間内に祝日はなかった。

調査方法 第1回調査の終了後、B5判の小冊子を配布し、その日の夜から7日間、毎晩就寝前に記入するように求めた。冊子はフェイスシートを含め両面印刷された4枚の記入用紙からなっており、各記入用紙には日付と曜日が印刷してあった。第2回調査の回答者数は大学生430名（男性231名、女性199名）、平均年齢は20.276（ $SD = .871$ ）歳であった。

調査内容 (a)記入時刻、(b)出来事：その日に起きた最も印象的な出来事を自由記述させた。(c)出来事に対する認知：記入された出来事について、1.出来事の肯定性（「快—不快」「良い—悪い」の2項目）、2.自分自身への影響の程度（「大きい—小さい」の1項目）を6件法で尋ねた。(d)感情：その日の感情状態について測定するため、一般感情尺度（小川・門地・菊谷・鈴木,2000）の肯定的感情と否定的感情を測定する16項目についての回答を求めた。「今、あなたは次の感情をどの程度感じていますか」という指示に続き、各項目の感情について「全く感じていない」から「非常に感じている」までの4件法で尋ねた。(e)自尊感情：その日の自尊感情を測定するために、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の日本語版（桜井,1997；10項目）についての回答を求めた。各文章の内容について「今のあなたに最もあてはまると思うもの」を「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」までの5件法での評定を求めた。

3. 第3回調査

調査時期 2001年12月17日。第1回調査時の一週間後、すなわち、第2回調査終了後に、同じ課目の講義時間を利用して一斉に質問紙調査を実施した。

調査方法 以下の内容からなる質問紙を、講義時間を利用して一斉に実施した。第3回調査の回答者数は大学生461名（男性244名、女性217名）、平均年齢は20.314（ $SD = .869$ ）歳であった。

調査内容 (a)一週間の振り返り：①1週間の評価（「とてもよい」～「とても悪い」）、②1週間の出来事（書けるだけ）とそれらの重要さの順位。③②で記述した出来事の中から重要な出来事3つを選ばせ、それぞれについて、それらが重要である理由（自由記述）、当時感じたり考えたりしていたこと（自由記述）、影響の大きさ（「小さい」—「大きい」の6件法）、

与えた影響の内容（自由記述）、影響の持続性（「その時だけ」—「今でも続いている」の6件法）についてたずねた。

結果

処理手続き

第1回調査における諸尺度については、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を施し、下位尺度ごとの得点を算出した。自己認識欲求尺度については、「自分の社会的な能力が、どのくらいあるのか知りたい」、「自分の性的魅力が、どのくらいあるのか知りたい」などの18項目（ $\alpha = .885$ ）からなる“自己認識欲求因子”と、「自分に関するよくないうわさは聞きたくない」、「自分についての悪口でも、真実だったらでできるだけ聞きたいと思う（逆転項目）」などの7項目（ $\alpha = .677$ ）からなる“情報回避欲求因子”とが得られた。逆転項目の処理を行った後で、各因子に高い負荷量がみられた項目を合計し項目数で除算した値を、それぞれ“自己認識欲求得点”、“情報回避欲求得点”とした。平均値は順に、3.301（ $SD = .692$ ）点、2.688（ $SD = .637$ ）点であった。自意識尺度についても同様に、「自分が他人にどう思われているのか気になる」、「自分についてのうわさに関心がある」などの11項目（ $\alpha = .832$ ）からなる“公的自意識因子”と、「つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている」、「ふと、一歩離れた所から自分をながめてみることがある」などの9項目（ $\alpha = .748$ ）からなる“私的自意識因子”とが得られた。逆転項目の処理を行った後で、各因子に高い負荷量がみられた項目を合計し項目数で除算した値を、それぞれ“公的自意識得点”、“私的自意識得点”とした。平均値は順に、4.780（ $SD = .859$ ）点、4.382（ $SD = .783$ ）点であった。

第2回調査については、以下のような手続きで得点化を行った。出来事の肯定性については、それを問う2項目（「快—不快」「良い—悪い」）間の相関が $r = .903 \sim r = .932$ を示していたことから、両者を合計し、項目数2で除算した値を、その日の“肯定性得点”とした。また、1週間の平均値を“肯定性平均”とした。

出来事の影響については、その出来事が自分自身に与える影響の程度を問う項目の得点を、その日の“影響得点”とし、1週間の平均値を“影響平均”とした。その日の感情については、各曜日における肯定感

情および否定感情の各8項目を合計した値をその日の“肯定感情得点”、“否定感情得点”とし、1週間の平均値を“肯定感情平均”、“否定感情平均”とした。その日の自尊感情については、逆転項目の処理を行った後で、各曜日における10項目の得点を合計した値をその日の“自尊感情得点”とし、1週間の平均値を“自尊感情平均”とした。また、1週間の自尊感情得点について個人ごとに算出した標準偏差の値を“自尊感情変動得点”とした。この得点が高いほど、自尊感情の変動性が大きいことを意味する。この値の平均値は3.924 ($SD=2.221$)であった。

自尊感情の変動性と自己との関係

自尊感情の変動性の高低によって、自己のとらえ方が異なるか否かについて検討を行った。ここでは、変動性得点によって被験者を2群にわけ、得点の低い者を変動性低群 ($n=207$)、得点の高い者を変動性高群 ($n=210$)とし、両群による自己認識欲求得点、情報回避欲求得点、私的自意識得点、公的自意識得点の差を、 t 検定にて検討した。その結果、統計的には有意傾向にとどまっていたが、自己認識欲求得点 ($t_{(415)}=1.667, p<.10$)、情報回避欲求得点 ($t_{(415)}=1.776, p<.10$)、公的自意識得点 ($t_{(415)}=1.880, p<.10$)において、変動性高群が低群よりも高いという結果がみられた。私的自意識得点においては有意な差はみられなかった。

自尊感情の変動性と出来事との関係

自尊感情の変動性と出来事との関係を検討するために、1週間の“影響平均”に注目し、さらに第3回調査において重要度の高いものとされた出来事について、その影響の大きさおよびその持続性の認知についての各平均得点を算出した。またここでは、出来事の肯定性あるいは否定性を個人がどの程度極端に評定するかを問題とするために、第2回調査における“肯定性得点”について、次のような得点処理を行った。1週間各日の出来事の肯定性は、「快—不快」「良—悪」を両極とした6件法で測定されているが、真ん中の選択肢2つに対する評定を1点、両極の選択肢2つに対する評定を3点とするように得点化を行い、1週間の得点の平均値を算出することで、評定の仕方における振幅の個人差をとらえることができるようにした。これを“出来事評価の極端さ”とする。以上のような得点処理を行い、各得点について自尊感情の変動性による差を検討した。

その結果、Table 1のような結果が得られた。影響の持続性以外のすべての項目の得点について群による

有意差が見られた。ここから、自尊感情の変動性の大きい者は、第1に出来事が肯定的であればより肯定的に、否定的なものであればより否定的にその出来事を評定すること、第2に出来事が自分に及ぼす影響をより大きく感じていること、第3に起きた出来事を数日後に振り返った時にも、自分に与えた影響をより大きく感じていることが示された。

Table 1 自尊感情変動得点と出来事のとらえ方に関する諸得点との関係

従属変数	自尊感情変動性 ^{a)}		F 値
	低群	高群	
肯定性評定の極端さ	2.024(.378)	2.165(.398)	$F_{(1,415)}=14.100^{***}$
影響平均	3.960(.672)	4.099(.740)	$F_{(1,415)}=4.012^*$
影響の大きさ(第3回調査時)	4.697(.885)	4.880(.908)	$F_{(1,415)}=4.358^*$
影響の持続性(第3回調査時)	4.064(1.176)	4.186(1.213)	$F_{(1,414)}=1.074$

*** $p<.001$, * $p<.05$

^{a)}括弧内はSD.

1週間における出来事・感情・自尊感情の関係

1週間の出来事の“肯定性平均”、“影響平均”、“肯定感情平均”、“否定感情平均”、“自尊感情平均”に注目し、1週間の出来事の評定および一般感情と自尊感情との関係について、自尊感情の変動性による違いを検討した。またここでは、出来事の評定が一般感情に与える影響、出来事および一般感情が自尊感情に与える影響を想定したモデルを仮定し、自尊感情変動得点の高低によってそれらがどう異なるのかを検討した。ここで用いた“肯定性平均”は、1週間の“肯定性得点”の平均値であり、得点が高いほど出来事を肯定的に評定することを意味する。なお、肯定性平均と自尊感情の変動性との相関関係は $r=.003$ であり、有意ではなかった。

自尊感情変動得点の中央値によって被験者を2群に分け、それより得点の低い者は変動性低群 ($n=207$)、それより得点の高い者は変動性高群 ($n=210$)とした。各群について、自尊感情平均と1週間の出来事の肯定性平均、影響平均、肯定感情平均、否定感情平均との関係を検討した結果は、Table 2の通りであった。

Table 2 1週間における出来事の肯定性、影響、肯定・否定感情と自尊感情との関係

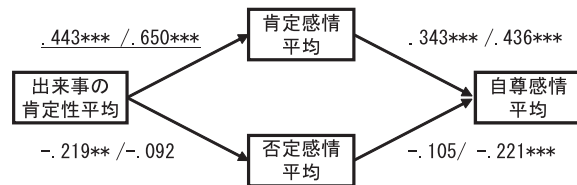
	肯定性平均	影響平均	肯定感情平均	否定感情平均
自尊感情平均 (変動性低群)	.216**	-.066	.337**	-.077
自尊感情平均 (変動性高群)	.356***	.058	.404***	-.142*

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

次に一般感情を媒介変数としたモデルを設定し、それについて、変動性の高群、低群による多母集団の同

時分析を Amos 4.05によって行った。なお影響平均についてはいずれの群においても自尊感情平均と有意な相関がみられなかったため、分析から除外した。その結果は、Figure 1の通りであった。なお、肯定性平均から自尊感情平均への直接的なパスは、高群、低群いずれにおいても有意ではなく、最終的にそれを除いたモデルを採用した。モデルの適合度は $\chi^2=34.304$ ($df=4, p<.001$)、 $GFI=.962$ 、 $AGFI=.810$ 、 $CFI=.888$ 、 $RMSEA=.135$ であった。被験者が多いことと GFI 、 $AGFI$ 、 CFI の値をふまえると、可能性として考慮できることを示唆する程度の適合度を示しているだろうと考えられた³。パラメータ間の差は、肯定性平均から肯定感情平均へのパスにおいて5%水準で有意であった。

Figure 1 一週間平均における出来事・感情・自尊感情の関係^{a), b)}



- a) 左側が自尊感情変動低群、右側が自尊感情変動高群における標準化推定値である (** $p<.01$, *** $p<.001$)。
b) パス係数に下線を引いたところでパラメータ間の有意差が見られた。

重要な出来事における出来事・感情・自尊感情の関係

さらに、重要な出来事のみ注目した分析も行った。自尊感情に関連するのは個人にとって重要な事象であることをふまえると、重要な出来事とあまり重要でない出来事との考慮なしに平均した値で検討するよりも、重要な出来事だけに絞って検討した方が、より明確な結果が得られるであろうと考えられるからである。そこで、第3回調査において、1週間のうち最も重要だったと被験者がとらえている出来事に関わる得点のみ(重要な出来事が起こった日の、肯定性得点、影響得点、肯定感情得点、否定感情得点、自尊感情得点)を用いて同様の分析を行った。その出来事が数日に渡っていた場合(たとえばレポート作成など)は、該当する日の平均値を扱うこととした。第3回調査において最も重要な出来事としてあげた記述が1週間日記帳に記載されていない被験者もいたが、その者については分析から除外した。そのため、ここでの分析対

象は358名(男性194名、女性164名)であった。なお、この場合の肯定性得点と自尊感情の変動性との相関関係を算出したところ、有意ではあるが低い値であった($r=.126, p<.05$)。

自尊感情変動得点の中央値によって被験者を2群に分け、それより得点の高い者は変動高群($n=181$)、それより得点の低い者は変動低群($n=177$)とし、各群について、重要な出来事の肯定性得点、影響得点、肯定感情得点、否定感情得点と自尊感情の関係を検討した結果をTable 3に示す。Table 2と比べ、重要日に限定したTable 3の場合には、自尊感情変動性の大きい者と小さい者の相関係数の差がより明確であり、自尊感情変動性の大きい者の自尊感情得点が、出来事の肯定性や一般感情とより強い関連を示しているといえる。

Table 3 重要日における出来事の肯定性、影響、肯定・否定感情と自尊感情との関係

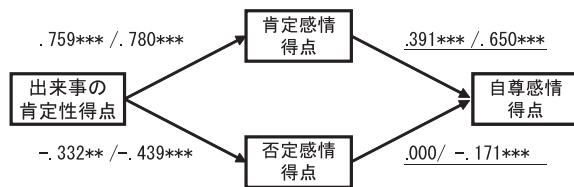
	肯定性平均	影響平均	肯定感情平均	否定感情平均
自尊感情平均(変動性低群)	.268***	-.038	.392***	-.086
自尊感情平均(変動性高群)	.626***	.043	.710***	-.392***

*** $p<.001$

重要日について一般感情を媒介変数としたモデルを設定し、そのモデルについて、変動性の高群、低群による多母集団の同時分析を Amos 4.05によって行った。なお影響得点については、いずれの群においても自尊感情得点と有意な相関がみられなかったため、分析から除外した。またここでも肯定性得点から自尊感情への直接的なパスは有意ではなく、最終的に先ほどと同様の、Figure 2のモデルが得られた。モデルの適合度は $\chi^2=2.152$ ($df=4, p=.708$)、 $GFI=.997$ 、 $AGFI=.985$ 、 $CFI=1.000$ 、 $RMSEA=.000$ と十分に高かった。パラメータ間の差は、否定感情得点から自尊感情得点へのパス($p<.01$)および、肯定感情得点から自尊感情得点へのパス($p<.05$)において有意であった。このことから、重要な出来事に注目した場合には、自尊感情の変動性による違いは、出来事の肯定性からその日の感情への影響という点では見られないが、その日の感情が自尊感情に影響するかという過程においてみられることが示された。

³ これらはいずれも、モデルの適合度を判断する指標である。一般に、適合度が十分であることを示すには、 χ^2 検定の結果が有意でないこと、 GFI 、 $AGFI$ 、 CFI が.900以上あること、 $RMSEA$ が.050以下であることなどが目安とされる。ただし、被験者の人数が多い場合には χ^2 検定の結果は有意となりがちであること、 $AGFI$ 、 CFI の適合度基準を.800以上で適合度があるとしている研究もみられることから、ここでは、「可能性として考慮することができる」と表記した。

Figure 2 重要日における出来事・感情・自尊感情の関係^{a), b)}



- a) 左側が自尊感情変動低群、右側が自尊感情変動高群における標準化推定値である (***) $p < .001$ 。
 b) パス係数に下線を引いたところでパラメータ間の有意差が見られた。

考察

本研究の結果から、自尊感情の変動性の大きい者ほど、出来事と自己との関係性が緊密であることが明らかにされた。

まず、1週間の出来事評価の極端さと出来事が自分自身に与える影響の程度の平均、および、振り返り時での影響の大きさの認知において、自尊感情の変動性による違いがみられ、いずれも変動性の大きい者が小さい者よりも得点が高いことが示されたところから、自尊感情の変動性の大きい者は小さい者よりも、出来事をより肯定的にあるいはより否定的にとらえており、その日の出来事についても、数日前の出来事についても、それらが自分に与える影響をより大きいものととらえているということである。

そして、そのような出来事と自尊感情との関係については、その日に起こった出来事が、その日の感情に影響を与え、そしてその感情が自尊感情に影響を与える、というモデルによって理解されるようであった。特に、重要な出来事が起きた日に注目すると、その日の出来事から感情への影響の仕方においてではなく、その日の感情が自尊感情にまで影響を与えるか否かにおいて、自尊感情の変動性による違いがみられた。この結果から、自尊感情の変動性の個人差とは、その日に起きた出来事に影響されて、その日の感情が浮き沈みするという個人差をそのまま反映しているわけではなく、その日の感情が自尊感情にまで反映されるか否かという点に関連するのではないかということが示唆される。ただし、一週間平均においては、むしろ、出来事によってその日の肯定感情の状態がどう影響を受けるかという点において変動性における差がみられ、明確な結果を得るには至っていない。この点に関しては、本研究で検討したモデル枠組みを用いて、さらに検討を重ねてそのメカニズムを明らかにしてい

く必要があろう。

出来事と自尊感情との関係は、出来事のみならず、個人の自己の状態にも大きく依存すると考えられる。本研究でもその点に注目し、変動性の大きい者は、自己に関して社会からの情報をより求める傾向があるのではないかと予想していたのであるが、その測定として本研究で用いた自己認識欲求および自意識の程度については、いずれも自尊感情の変動性による有意な差はみられず、その傾向が示されるにとどまった。ただし、自尊感情の変動性が、出来事および感情と自尊感情との関係の差異という枠組みで理解されるならば、自尊感情の変動性の個人差を考える際には、その者の自己の問題と、自己にとっての出来事という視点はやはり重要であるように思われる。

本研究で取り上げたのは、自己認識欲求や自意識という、自己に関して他からの情報に敏感であるか否かという点であった。もちろんそこには、測定上の問題もあげられる。本研究ではその者の自己のあり方について、自己をどのようにとらえようとするのかという点に注目した。そのため、測定すべきところが測定できていなかった可能性がある。しかしこの点についての議論は、溝上(1999)などでなされ始めてはいるものの、ここで十分な見解を示すことは難しい。よってここでは、以上のような考察にとどめ、以下には、出来事と自尊感情との関係について概念的に議論したい。

考察の冒頭にあげたように、自尊感情の変動性の大きい者は、出来事への感受性が高いことが示された。そして、出来事から感情、そして自尊感情への結びつきも強いといえる。そこで問題としたいのは、自尊感情の変動性の大きい者にとっての自尊感情と、その日の出来事のもつ意味である。そこには2つの可能性が考えられる。

1つの可能性は、自尊感情の変動性が大きい者は、あまり自己が明瞭に概念化されていないため、自尊感情を問われた際に、具体的な自己についての表象に基づくとよりも、その時の気分まかせでそれに答えたということである。その時の感情が認知を凌駕する傾向についてはこれまでも指摘されてきたが(Brown, 1993)、特に自分自身についての自己認識をもたない場合には、その時の感情に照らした形で自尊感情の程度を判断する傾向にあるのではないだろうか。これまで、自尊感情が高い者ほど自己概念の明瞭性も高い(Campbell, 1990)ということが明らかにされているが、そこにはおそらく、自尊感情の変動性と

の関連もおそらく指摘されるのではないかと思われる。

また Fenigstein (1984) は、人についてのエピソードを聞いた際に、自分にあてはめて聞いてしまう者とそうでない者がいることを指摘している。常に物事を自分にあてはめてとらえてしまう者の出来事への感受性は、非常に高いと思われる。そこには自尊感情の変動性の大きい者と類似する心理メカニズムがあると考えられるが、人についての情報を得ると自己情報としてしまう傾向は、そもそも確たる自己情報を持ちえていないからではないかと思われる。今回の被験者が大学生であることを考えると、アイデンティティ自体が不確実である者の存在も想像される。そのような者の自尊感情が自己情報以外のところで規定されても不思議はないとも考えられる。

2つ目の可能性は、その者のとらえる“自己”概念が、非常に広範な場合である。日本人の“自己”が、他との関係性と依存関係にある中でとらえられるものであることが指摘されて久しいが (Markus & Kitayama, 1991)、自尊感情の変動性が大きい者のとらえる自己が、自分の周囲の様々な状況を含み込む形で解釈されるのであるならば、状況の変化や出来事それ自体が、自己を構成する重大な要素になると考えられるのである。Becker (1962/1971) は、愛車ジャガーを傷つけられて自尊心の傷付きを覚える男性の例をあげているが、それは、愛車ジャガーを傷つけられるということが、その人が自己ととらえているもの (物理的自己としての愛車ジャガー) そのものを傷つけられることであることを示す。この、愛車ジャガーに匹敵する事物、すなわち、その人にとっては単なる物や他者ではなく、自己としてとらえてしまうようなものが、日常世界にかなりの程度でちりばめられているのではないかということである。つまり、自尊感情の変動性が大きい者にとっては、一日一日の出来事それ自体が、認識される自己表象の内容であり、表象される自己自体が出来事に連動して変動するため、当然それについての価値評定も変動するのであろうということである。

しかしながら、出来事から自尊感情への直接的なパスがみられなかったことから、以上の考察はおそらく次のように修正することが可能であろう。

つまり、自尊感情の変動性の大きい者にとっての

“自己”は、他の事象と結びつく接点を容易に見出し、出来事や状況に応じて、個人にとっての重要な領域に及ぶところをも巻き込んだ再体制化が常に起こっているのではないかということである。Markus (1977) は個人の自己認知のシステムとしてセルフ・スキーマを仮定した。Markus の議論では、そのスキーマの濃度や、たとえば、自己にもっとも近い事象群と自己との距離の個人差、あるいはそのスキーマの継時的変化ということには触れられていないが、おそらくそのような点にも個人差が存在するのではないだろうか。これは、その時その時の情報を柔軟にとりこみ、その都度それらを含み込んだ形で全体的自己概念を再構成することができているようなあり方である。Rogers (1951) のいう“経験に開かれた状態”ともいえるし、様々な価値のスタンダードが混在する現代社会においては必要なあり方ともいえる。ただし、本研究で問題にした自尊感情の変動性が、自己概念の非常にベーシックなところ⁴をも伴う自己の変動を意味していないとは言い切れないため、この点については引き続き詳細な検討を行う必要があるだろう。

以上の考察は、出来事や自己以外の事象との関係の中で、自己がどのように変化する性質を有しているのかということに関わる場所である。ここまでの考察についてだけでも、測定、概念、方法など、検討課題は多い。しかしここに、本研究の主要な知見である、出来事をいかに解釈するのかということにも自尊感情の変動性の違いがあるという見解を加えると、そのような自己のあり方は、無自覚なところで成り立っているというよりは、自己との関係において物事をどうとらえるかという点において、半ば自覚されているのではないかと考えられる。出来事と自己との関係を軸としながら、時間軸やそれらを取り巻く事象を考慮しながら、さらなる検討が進められていく必要があるだろう。

なお、本研究で用いたような、同一内容の調査項目に反復して回答を求める調査方法によって自尊感情の変動性を測定する場合、被調査者の回答態度など回答の信頼性の問題を考慮することが重要である。本研究では第3回調査を用いた分析の場合に、第3回調査の記載内容と1週間日記帳の記載内容が対応していないデータを省くかたちでこの問題に対処したが、今後の研究では、毎日くり返される調査の中で回答の信頼性

⁴ Rosenberg (1986) によると、自己概念は、状況や場に応じて変化する“気圧的 (barometric)”性質のところと、場や状況を超えてある程度一定した様相を示す“基線的 (baseline)”性質のところとがあると考えられている。ここで「ベーシックな」と表現したのは、後者に関するところである。

の問題に対処していくことも必要となるだろう。

引用文献

- Baumeister, R.F., Smart, L., & Boden, J.M. 1996 Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.
- Becker, E. 1971 *The birth and death of meaning. An interdisciplinary perspective on problem of man, second edition*. New York: The Free Press. (original work published in 1962)
- Brown, J.D. 1993 Self-esteem and self-evaluation: feeling is believing. In J.Suls(ed.), *Psychological perspectives on the self vol.4: The self in social perspective*, (pp.27-58) Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Campbell, J.D. 1990 Self-esteem and clarity of the self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 538-549.
- 遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係—重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討— 教育心理学研究, 40, 157-163.
- Greenier, K.D., Kernis, M.H., Waschull, S.B., Berry, A. J., Herlocker, C. E., Abend, T.A. 1999 Individual differences in reactivity to daily events: Examining the roles of stability and level of self-esteem. *Journal of Personality*, 67, 185-208.
- ジェームズ, W. 1892 *Psychology: The briefer course*. Edited by Gordon Allport. Notre Dame Indiana: University of Notre Dame Press. (今田寛訳 1961 心理学(上)(下) 岩波文庫)
- 上瀬由美子 1992 自己認識欲求の構造と機能に関する研究—女子青年を対象として— 心理学研究, 63, 30-37.
- Kernis, M.H., Granneman, B.D., & Barclay, L.C. 1989 Stability and level of self-esteem as predictors of anger arousal and hostility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 1013-1022.
- Kugle, C.L., Clements, R.O., & Powell, P.M. 1983 Level and stability of self-esteem in relation to academic behavior of second graders. *Journal of Personality & Social Psychology*, 44, 201-207.
- Kernis, M.H., Whisenhunt, C.R., Waschull, S.B., Greenier, K.D., Berry, A.J., Herlocker, C.E., & Anderson, C. A. 1998 Multiple faces of self-esteem and their relations to depressive symptoms. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 657-668.
- Kernis, M.H., Greenier, K.D., Whisenhunt, C.R., Herlocker, C.E., & Abend, T.A. 1997 Self-perceptions of reactions to doing well or poorly: The role of stability and level of self-esteem. *Personality and Individual Differences*, 22, 845-854.
- Markus, H. 1977 Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 63-78.
- Markus, H.R. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Miyake, K. 1993 Social comparison, and level and stability of self-esteem: Self-esteem management through social comparison. Submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of doctor of philosophy. (unpublished)
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論—実証的心理学のパラダイム— 金子書房
- Moretti, M.M., & Higgins, E. T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem: The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 108-123.
- Mortimer, J.T., Finch, M.D., & Kumka, D. 1982 Persistence and change in development: The multidimensional self-concept. In P. B. Batles & O. G. Brim (Eds.), *Life-span development and behavior, vol.4*, (pp.263-313). New York: Academic Press.
- 小川時洋・門地理絵・菊谷麻美・鈴木直人 2000 一般感情尺度の作成 心理学研究, 71, 241-246.
- Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy: Its current practice, implications and theory*. Boston: Houghton Mifflin.

- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Rosenberg, M. 1986 Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls, & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the Self*, vol. 3, (pp. 107-136). Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 桜井茂男 1997 現代に生きる若者たちの心理 風間書房
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- Turner, R.H. 1968 The self-conception in social interaction. In C. Gordon & K.J. Gergen (Eds.), *The self in social interaction*, (pp. 93-106). New York: Wiley.
- Wells, L.E. & Sweeney, P.D. 1986 A test of three models of bias in self-assessment. *Social Psychology Quarterly*, 49, 1-10.

A study of instability of self-esteem from the view of daily events and the self.

Abstract: The purpose of this study was to investigate the instability of self-esteem from the view of the relationship between daily events and the self. About 400 university students entered the study. They answered daily record during 7 days. In this study, the instability of self-esteem was defined by the standard deviation calculated from daily self-esteem scores of 7 days in this study. We examined the difference of the instability of self-esteem on the self-recognition need, self-consciousness personality, and events scores, and the difference of structure of the relationship

among events, affect, and self-esteem. The results were follows: (1) Those with big instability of self-esteem estimated daily events more effective, and more positive or more negative. (2) The relationship between events and self-esteem was understood as the structure of the self-esteem effected by affects effected by events, and, the relationship among these variables was more strong in those with big instability of self-esteem.

Kew Words: instability of self-esteem, daily event, affect, daily record, the self